



CFI ニュースレター C2022-10 分水嶺に立って

[今月の聖書]

またあなたが右に行き、あるいは左に行く時、その後ろで「これは道だ、これに歩め」と言う言葉を耳に聞く。

(イザヤ 30: 21)

「今日み声を聞いたなら、神に背いた時のように、あなた方の心をかたくなにはいけない」。 (ヘブル 3: 15)

さて、イエスはエリコに入ってその町をお通りになった。ところが、そこにザアカイという名の人があった。この人は取税人のかしらで、金持ちであった。彼は、イエスがどんな人か見たいと思っていたが、背が低かったので、群衆にさえぎられて見ることができなかった。それでイエスを見るために、前のほうに走って行って、いちじく桑の木に登った。そこを通られるところだったからである。イエスはその場所にこられた時、上を見上げて言われた、「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。今日あなたの家に泊まることにしているから」。そこでザアカイは急いで下りてきて、喜んでイエスを迎え入れた。(ルカ 19: 1-6)

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。」 (伝道の書 3: 1)

ところが、道を急いでダマスコの近くに来た時、突然、天から光がさして、彼をめぐり照らした。彼は地に倒れたが、その時「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。そこで彼は「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねた。すると声があった、「私はあなたが迫害しているイエスである。さあ立って、町に入っていきなさい。そうすれば、そこであなたのなすべきことが告げられるであろう」。(使徒行伝 9: 3-6)

お元気でお過ごしでしょうか。今月は「分水嶺に立って」という題を選びました。これは私の20代初めの経験から、ずっと心の中に去来している言葉です。日本列島は北から南まで山脈があり、その山の稜線が分水嶺となっています。同じ雲から降った雨が、一滴は太平洋に、また一滴は日本海に流れていきます。誰の意思によってそうなるのかわかりませんが、太平洋と日本海と言う全く異なる方向にその水は導かれてしまうのです。それは大変劇的なことであり、兵庫県の「水分れ公園」、岐阜県の「ひるがの高原」、広島県の「分水界泣き別れ」などは名所となっています。その意味は、「物事がどうなっていくか決まる分かれ道、岐路、分岐点、あるいは転機」を指しています。

人生における分水嶺では、その瞬間の決断が重要になります。自己中心か神中心か、刹那的か永遠的か、利益中心か愛のためか、闇に向かうか光に向かうか、一瞬の決断が迫られます。そこに「信仰の光」が作用したら幸いです。「人間の一生において、また彼の運命全体について決定するものは、ただ瞬間のみ」とゲーテは言いました。

私は1967年10月10日、新宿の淀橋教会にふらふらと入った夜7時40分、人生の決定的な転機を経験しました。死に場所を探していた青年が、命を見出し、光に向かって歩き出したのです。結果的に今日まで55年間、聖書を語り、光を宣べ伝える道を選びました。まさにあの夜は「分水嶺に立っていた」のです。もしあの一瞬を捉えなければ、今日地上に生きている事はなかったでしょう。

その意味で「分水嶺を見極める」ことが実に大切です。

しかしそれも自分の研究の結果や強い意思によって見極めるのではなく、一瞬の神の恵みの光によってなされるのです。ザアカイが、いちじく桑の木の上からイエスに出会ったように、ダマスコに向かう馬上で、パウロがイエスのみ声を聞いたように、私の人生にもあの日、分水嶺で神の声を聞く機会が与えられました。

もしあなたの人生にもそのような分水嶺があるなら、光の道を選択されることを祈ります。その道がいかに険しくても、見たこともない広い世界へ流れていくことができるでしょう。

(お知らせ)

*引き続きウクライナ支援募金にご協力ください。小さな祈りを積み上げていきましょう。

*11月26日ウクライナ支援「メサイア2022」のご案内をいたします。ぜひおいでください。

◆◆◆ CFI 会員投稿原稿 第 87 ◆◆◆

「私を信仰に導いてくれた 3 人の女性」

齋藤純一（神奈川県）

ライトハウスからは今も欠かさず、また変わらずメッセージ CD を、お送りいただき感謝しています。いつも一方的にメッセージを聴かせていただく側ですが、たまにはお便りをと書かせていただきました。

私は 1985 年 5 月に受洗しました。受洗にいたる大きな出来事は 3 歳になる息子を手放さなければならないという現実と直面したことです。それまでは自らの知恵や力を頼みとし、多少の不条理な出来事もそのまま受け止めていく強さが必要としていたが、可愛い盛りの息子との別離はとても受け入れることができず苦しみました。このとき後にお話しする K 姉の祈りと導きの中で聖書をより深く読むようになり、やがて自ら十字架にかかっていこうという思いに至りました。すると現実の事態は何も変わりませんでした。心の中は崇高な思いで満たされ、この悲しい現実を通り過ぎることができました。ああ、これが信仰していくことなのだなと気づかされ、受洗を決意していきました。受洗にいたる直接の出来事は上記のとおりですが、その伏線として 3 人の姉妹との出会いが神様により用意されていたように感じます。自らの意思をもって歩いているつもりですが、もっと大きな意思によって歩かされている・・・神様のご計画の存在を感じています。



I 姉は日曜学校の大好きな先生でした。彼女の家は湧水地にあり水路や山葵沢に囲まれて建っていました。春のまばゆい光の中で、このおとぎ話に出てくるような家の入口付近には黄色いプリムラの花が生き生きと咲いていました。今でもこの黄色いプリムラの花を見ると I 姉のことを思い出します。

H 姉は日系二世のブラジル人で留学生として来日していました。海外日系人大会の手伝いに行っていたとき出会いがありました。私の書棚には彼女からの聖書があります。その裏表紙には「人生は愛なり」と記されており。

K 姉は祈りの人であり、私の第 2 の母のような人でした。一人暮らしを始めた時の近隣の方で、初め視線を合わせた時あまりに H 姉と似た雰囲気や顔立ちで驚かされました。私の人生の困難な時いつも祈りをもって見守ってくれ、私の受洗を喜び、この言葉を添えてくださいました。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。主はこの卑しいはしのために目を留めてくださったからです」(ルカ 1:46-48)

◆投稿募集のご案内◆

皆様の原稿をお待ちしています。

毎月の CFI ニュースレターの裏面に順次掲載させていただきたいと思っております。

- ・すくい体験のあかし
- ・個人的願いや祈り
- ・信仰生活のあかし
- ・主にある交わりのレポート
- ・最近気づいたことや発見したみことば
- ・CFI メッセージの感想や教えられたこと

何でも結構です。800 字程度で、手紙、ファックスかメールで送ってくだされば幸いです。